

Ⅲ. キャリア形成を軸とした総合人間科の取り組み

中学1年生

ともに学び合う「生き方を探る」総合人間科の授業実践 ～「出会い」を軸に、生き方決定の足跡をたどる～

木下雅仁・大林直美
原順子・山田孝
山田玲子

【抄録】 平成14年度に新しい学習指導要領が幼稚園・小学校・中学校で導入され、全国一斉に「総合的な学習の時間」の取り組みが開始された。実際には、すでに多くの学校園において平成14年度以前の移行措置の期間に試行的な取り組みが行われてきている。平成14年度に本校に入学してきた生徒たちの多くも、小学校時代に「総合的な学習の時間」の取り組みを行った経験を持っていた。主に集団（グループやクラス全体）で個別的なテーマに焦点を当てた小学校時代のトピック学習とは異なり、中学1年生では「生き方を探る」という大テーマのもと、キャリア形成につながるような「生き方を探る」学習を進めてきた。2002年度の授業実践においては、プログラムの大まかな内容については例年の流れを継承しつつ、「ともに学ぶ」ことを重視する学年のテーマに沿った活動をすべく、同じ「生き方を探る」というテーマで総合人間科の学習を進める高校3年生の生徒を講師に迎え「生き方を探る講演会」を実施し、1年間の学習活動を締めくくった。同学年の仲間同士で学び合う活動を一歩広げ、他学年の生徒、それも高校生と「ともに学ぶ」ことによって、生徒たちに入口（中1）と出口（高3）が一本に結ばれた中高一貫カリキュラムの特質を意識させる試みとなった。

【キーワード】 生き方を探る 出会い キャリア形成 とともに学ぶ 異学年との学び合い

1 はじめに

中高一貫の6年間にわたって、常に自分の将来の方向性を意識しながら過ごすことができればどれだけ素晴らしいことであろうか。しかし、現実としては、中学校に入学してきたばかりの1年生の生徒に、「さあ、早速、これからの人生の生き方や方向性（進路）について考え始めましょう」と促したところで、その必要性や必然性を実感させることは極めて難しい。

2002年度の中学1年生の総合人間科の取り組みにおいては、木下他（2002）において報告したような例年通りの学習プログラムを発展させ、「高校3年生に学ぶ『生き方を探る』講演会（以下、「生き方を探る講演会」）」という取り組みを学年末に企画した。実際に本校において中高一貫の6年間にわたって総合人間科の取り組みを続けてきた高校3年生の先輩たちに、それぞれの進路決定の道のりと6年間の総合人間科の学習との関わりについて目の前で語ってもらうことによって、ひとつの学習モデルを捉えようと試みたのである。

このような取り組みは過去において中学1年生で取り組まれたことはない。しかし、6年後の達成モデルを中学1年生に示すこと無しに、生徒たちに中高一貫の6年間という長い期間の学習結果をイメージさせることは難しいと思われることから、この取り組みは一定の意義を持つものであろう。

また、この講演会においては、中学2年生も招き、中学1年生とともに学習を行った。複数の学年の生徒たちが一同に集い、自分たちの将来や進路について夢や想いをそれぞれの胸の中に馳せながら、総合人間科の取り組みのあり方についても検討することができた。

本稿においては、2002年度の中学1年生の総合人間科の取り組みの中でも、特に、11月に実施した第2回フィールド・ワークと、2月に実施した「生き方を探る講演会」について報告を行うことにする。

2 2002年度の授業実践の流れ

(1) 学年の目標

たまたま手にした1冊の本や、耳にした言葉、出会った人など、身近な生活場面で遭遇する様々なきっかけで自分の視野が広がったり、新しい価値観を見つけ出したことは誰にでもよくあることである。中学1年生では、2度のフィールド・ワークや高校3年生を講師に迎えた講演会などの取り組みを通して、できるだけ多くの人と“出会い”、その人々の生き方決定に関わる経験や歴史、細かなエピソードなどに触れ、自分自身の生き方や進路に関わっての方向性を見定めるきっかけを得ようと試みる。

(2) 学年テーマと「キャリア形成」との関わり

中学1年生の学年テーマは、本校で平成7（1995）年度

に総合人間科のプログラムをスタートさせて以来、一貫して「生き方を探る」を掲げてきた。当時、本校は文部省(当時)の研究開発学校の指定を受け、「自分の人生を自覚的に選択していく力を育てる教育課程の開発」の実践研究を行っていた。そのフィロソフィーは当時から受け継がれており、“自覚的”という言葉に象徴されるように、中学1年生では、個や個性を尊重し、フィールド・ワークに代表される個人研究活動を通して、生徒の内面に主体的かつ自律的に「生き方を探る」プロセスを起動させることをねらいとしている。

1年間の取り組みの過程では、第1回フィールド・ワークでは、「身近な成人(大人)」の考え方に触れることを目的として、ペアを組んだクラスメートの保護者にインタビューに出かけた。第2回フィールド・ワークでは、自分が興味・感心を持つ職業や社会的活動に従事する「専門家(社会人・大人)」にインタビューを試みた。学年末の「生き方を探る講演会」では、高校3年生の先輩という「ごく身近な年長者」から生き方決定の体験談を聞いたり、高校3年生の担任の先生方という「校内における身近な大人」の考え方に触れたりもした。

こうした学習経験を通じて、「生き方を探る」という中学1年生の総合人間科の取り組みが、単なる「職業調べ」で終わるのではなく、より多くの社会のさまざまな次元に生きる人々の「生き方・生き様」を知り、また、その人々の考え方に触れることにつながった。それによって、生徒たちが「では、自分はどう生きたいのか?」と、心の中で“自覚的”な問いかけをし始め、キャリア形成の第一歩を踏み出してくれたと考えている。

3 フィールド・ワークと講演会

(1)第2回フィールド・ワークについて

総合人間科の学習のハイライトとも言える第2回フィールド・ワークが、2002年11月12日火曜日の午後に実施された。前期に実施した第1回フィールド・ワークでは、ペアを組んだクラスメートの家庭を訪問し、その友だちの保護者の方などにインタビューをした。第2回フィールド・ワークでは、内容を少し発展させ、一人一人が興味や関心のある職業や活動に携わっている社会人に、その方たちの「生き方を探る」こと念頭に、単独インタビューを行うという個人研究を行った。「初めて会う、全く知らない大人の方に、自分一人だけで会いに行き、そして、インタビューする」ことは、中学1年生にとっては大変な作業である。しかし、緻密な計画と入念な準備を行い、80人全員がそれぞれに有意義なフィールド・ワークを行うことができた。



《研究テーマの一例》

弁護士の人々の守り方／アナウンサーへの道／飼育係とイルカのきずな／サッカー部監督として／人を助ける仕事をして感じる事／通訳とは／人を応援すること／消防士の仕事について／開発研究の楽しさ／音楽で働いている人／警察犬の訓練士として働くこと／パイロットのこと／市民の安全を守る／ピアノの魅力と楽しさについて／サッカーと勉強の両立／新聞記者としての誇り／教師について／稲に対する関わり方／人のために自分が働く／患者さんとの出会い／ボランティアに生きる人々／昆虫学者の生き方／声優になるために必要なこと／野球について／心理カウンセラーという職業に出会って／子どもと接するとは...／自分の道を突き進む女性／交通事故ゼロを目指して／選手の管理術／アナウンサーについて／ボランティアの心がけ／犬の美容専門店のすべて／アナウンサーへの道／子どもと接する医者への努力／動物とのふれあい方／変わる！障害者に対する見方／スポーツ選手としての自覚／ etc.



生徒たちは、実際にフィールド・ワークに行ってみて、いろんな発見、感動、驚きなどを体験的に実感し、人間的に一回り大きくなって帰ってきてくれた。次のようにフィールド・ワークの感想を書いた生徒がいた。

「満足のいくフィールド・ワークを終えて」

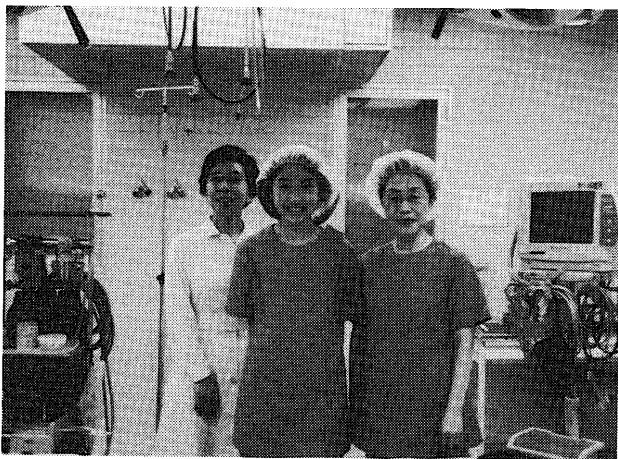
私は、今回のフィールド・ワーク先として、新聞社を選びました。なぜなら、取材のプロとも言える新聞記者の方にお話を伺いたかったからです。

私は、アポイントメント取りがなかなかうまく行きませんでした。1回目のアポイントメント取りで...、C新聞社に断られました。その時にどうしようかすごく迷って、結局、違うところをあたってみました。そしたら、なんとA新聞社はOKしてくれました。私はこの時、やる気で胸がいっぱいになるのを感じました。

その後、依頼状、質問作り...など順調に進んでいき、とうとうインタビュー当日を迎えました。インタビューでは、相手の方が詳しく、丁寧に質問に答えて下さって、とてもうれしかったです。それに、実際にF・Wに行かなければ分からないこともたくさん知ることができました。最後に、編集局の方も見せてもらいました。編集局では、普段見ることのできないものがたくさんありました。もちろん、写真も撮らせていただきました。

このように、今回のF・Wはとても満足のいくものとなりました。ここまで来るのにいろいろと苦労はしたけど、とても良い経験となりました。普段、仕事で取材をしているプロの方に自分が取材に行くなんて、とても面白いことでした。今回のF・Wで得たものを最大限に利用し、発表したいと思います。(C.T.)

このように、中学1年生の初めてのフィールド・ワークにおいては、いろいろと苦労したり、失敗にぶつかったりすることの連続であるが、その分、最後に得られた充実感や達成感は格別のものであったようだ。



《フィールド・ワーク先の一例》

CBC／カトリア学園／クララオンライン／中京大学／愛知農業センター／いりなか保育園／名古屋大学地震火山観測研究センター／知的障害者自立支援施設べにしだの家／米野交番／川瀬クリック／愛知県美術館／あいせい記念病院／名古屋盲学校／平松小児科／東山線運 転区／コスチューム京／天白消防署／くらしを耕す会／名古屋市教育委員会教育セ

ンター／(株) ナムコ／劇団ひまわりアクターズスクールetc.

(2)高校3年生に学ぶ『生き方を探る』講演会

①中高一貫の学習の流れを意識した取り組みの企画

本校では、総合人間科(総合学習)の取り組みに関わって、中高一貫6年間のカリキュラムを「1-2-2-1制」というかたちでデザインしている。導入期にあたる中学1年生(入口)と、それぞれの生徒がキャリア形成を目指し進路選択・決定を行っていく高校3年生(出口)においては、ともに「生き方を探る」というテーマを掲げている。

高校3年生の学習は、高校卒業後の進路選択と関連して、進学か就職か、4年制大学か短大・専門学校か、あるいはどの学部・学科に進むのかなど、極めて具体的に現実的な形で「生き方」を探る場面が多くなる。一方、中学校に入学したばかりの中学1年生の学習においては、身近な大人(教師や友だちの父母など)から体験談を聞くことに始まって、「自分が興味・関心を持っている職業・社会的活動に従事している社会人」へのインタビューを行うことをハイライトとしている。自分の「生き方」を決定することを直接的なゴールとするのではなく、「さまざまな生き方で異なる社会的活動(職業)をしている人が世の中には大勢いるのだ」ということを、フィールド・ワークなどの調査・研究活動を通じて体験的に「知ること」自体を自己の生き方決定の“きっかけ”とすることが到達点とされているのである。

このように、広い間口から入ってより絞られた出口を目指す「生き方を探る」取り組みは、中1から始まり高3へと一貫して続いて行くのである。

ところで、中学1年生の総合人間科の最初の授業において、我々教師は次のように語りかけることが多い。

「総合人間科の授業では、今日からみなさん一人一人に自分の『生き方』を探ってもらいます。自分が興味・関心を持つ職業人・社会人の活動について調査してみましょう」と。しかし、こんな言葉を投げかけると、中学校という新しい世界に飛び込んできた1年生たちの多くは、羅針盤も海図も持たずに眼前の大海を眺めているかのごとく、ただただ戸惑うばかりである。「中1から始まる総合人間科の取り組みは、高3で卒業するときの自分の『生き方決定』につながっていくのだよ」と話しても、実際には、中学1年生にとっては、そのイメージをつかむことや、この学習の意義を理解することは極めて困難な作業となる。

「生き方を探る」というテーマの大きさゆえに、誰でもが自由にアプローチできるという長所は、裏返すと、「間口が広すぎて」何から手を付けたらよいかかわからない、という問題を生むことにもつながる。「ここで6年

間（総合人間科の取り組みを）やっているうちにだんだん何かが見えてくるよ」。これが今までの中1の担当者たちの常套句であったかもしれない。しかし、「ここ（名大附）で総合人間科をやっているって、実際、どうなるの？」という漠然とした不安、疑問、あるいは期待に我々教師はしっかりと応えて来られたのであろうか。この問題意識に基づき、平成14年度中学1年生学年団では、1年間の総合人間科の取り組みのまとめとして、「高校3年生に学ぶ『生き方を探る』講演会」を企画した。

②身近な先輩の生の声を聞く

「総合人間科の取り組みは本当に自分にとってプラスになるのか」「なるとしたら、どのような形で効果が出てくるのか」こうした素朴な疑問は中学1年生の誰もが抱いていると思われる。我々教師が「総合人間科は今後きっと役に立つよ」といくら力説しても、なかなか説得力は生まれてこない。それでは、同じ学校で、同じ総合人間科の学習に取り組んできた先輩たちから直接話してもらったらどうだろうか。こんな軽い気持ちがこの講演会の企画の発端となった。

高校3年生担任団の協力を得て、平成15年1月末の時点で進学・就職先が決定している本校の高校3年生の中で、内部進学者（つまり、6年間本校で総合人間科の学習を行ってきた者）4名を選出し、中学1年生学年団総合人間科担当者が直接4名にこの行事の趣旨の説明と講演依頼に向かった。

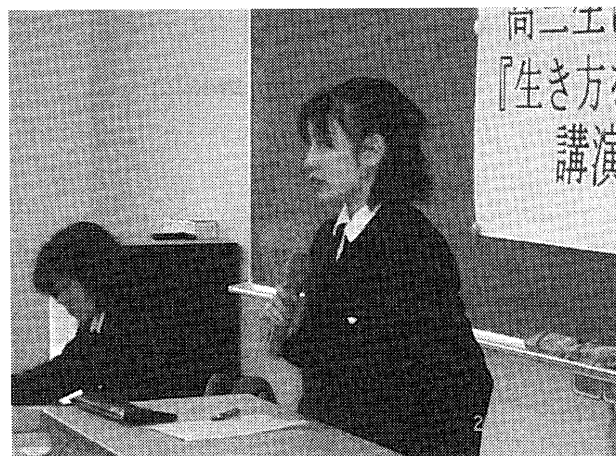
「2月6日（木）の総合人間科の授業時に、中1生80名、中2生80名、そして、保護者や教員などを集めて『生き方を探る』講演会を開きたい。あなたたちの進路（生き方）決定と総合人間科の学習との関わりについて、後輩たちに向けて、自由に6年間を振り返った学習体験・経験について話してもらえないか。」こんな唐突な依頼にも関わらず、4名の高校3年生たちは二つ返事で快諾してくれた。講演会は5・6限目の2時間連続で行い、5時間目は4名の高3生に講演をしてもらい、6限目は当時の高3学級担任3名（国語・数学・理科の担当者）から「高3生に接する毎日から気づいたこと」をテーマに講話をもらうことにした。

4人の高3生講師の簡単なプロフィールは次の通りである。

C・Tさん（女子） 小学校時代、ガールスカウトの活動に熱心だったTさん。中1の総合人間科フィールド・ワークで、ガールスカウトの事務局があった熱田神宮を訪れたのがきっかけで、卒業後の進路も熱田神宮へ。将来は大学へ進学し、現在興味を持っている考古学の勉強をすることも計画中。中1の時の将来の夢は弁護士になることだった。



S・Nさん（女子） 小学校時代から名古屋大学へ進学することを目標とし、名大附に入学してからは家庭学習の習慣を完全に確立。学校の授業を大切に、安定した学習姿勢と人一倍の努力で一般公募推薦で名大進学という6年越しの夢を実現。中1、高1、高3のフィールド・ワークはすべて名大を訪問するという徹底ぶり。現在は中国との経済問題に関心を持ち、名古屋大学経済学部のと和田教授のゼミで学ぶことを希望している。



M・Nさん（女子） 中1の時から幼稚園教諭になることを目標に設定していた。高1になって、金城学院大学人間科学部現代子ども学科の指定校推薦の枠が名大附高に与えられていることを知り、学校の勉強を丁寧になんばり実力つけ、3年間の努力が実り校内選抜に合格。そして、指定校推薦入試も合格。心理学と児童教育学を同時に学べる金城学院大学では、親に対する支援について学ぶ「家庭援助論」の講座を中心に勉強していく予定。



Y・Hさん(男子) 名大附での中高6年間、野球部の活動を頑張った。チームが強くなるためには、自分の技術向上を目的とした練習をするだけでは効果がなく、むしろ、同級生や後輩を指導してチーム全体で技術を向上していくの方が大切だ、という独自の視点を持ったことがきっかけで、教育に関心を持つようになる。愛知教育大学教育学部に一般公募推薦で合格。人前に立って話をしたり、みんなを笑わせたりすることが大の得意。



せっかくの企画なので、中学2年生もこの講演会に招待することにした。その結果、当日は中1生の保護者や教員も含めると180名ほどの参加者が集まった。ただ高3生と高3担任に話を聞かせてもらうだけの企画にもかかわらず、2時間の間中1・2の生徒たちの集中力と緊張感はとぎれることもなく、全員が熱心に講師の話に耳を傾けていた。講師の表情をじっと見入る生徒。熱心にメモを書き取り続ける生徒。テープレコーダーを持参して講演の内容を録音する生徒。それぞれの生徒は、このせっかくの機会を逃すまいとする意気込みであふれていた。

講演の内容は様々であり、個性にあふれていた。しかし、その講演の内容に劣らず、4名の高3生がそれぞれに自分の歩んできた6年間と、それに伴走してきた総合

人間科の存在について堂々と語ってくれた姿は圧巻であった。4名の表情は自信と満足感、そして未来に向けた希望にあふれていた。圧倒的で存在感のある彼らの姿は、総合人間科の学習の効果と意義を立証できる「生き証人」として中1・2生の目に映ったことであろう。こうした先輩の姿に直接触れることができた経験が、彼らにとっては、この行事が生み出した最大の財産になるのではないだろうか。

③講演会で受け取った先輩からのメッセージ

高3生と中1生が、ともに総合人間科の学習においては「生き方を探る」というテーマを掲げているのだから、何か接点のある取り組みをしようと考えことは自然な成り行きのものであるものの、実はこのような講演会は今までに行われたことがなかった。今後もこのように生徒同士(中学生と高校生)が「ともに」学び合える機会を大切にしながら、総合人間科の取り組みを発展させていきたいものである。

最後に、当日講演会に参加して頂いた中1生の保護者から寄せられた感想文を紹介しておきたい。生徒・保護者・教師が一緒になって「ともに」学び合える機会がこの講演会に凝縮されていたことがこの感想文から伺えよう。

スピーカーの高3生4人は、とても堂々とわかりやすく、熱心に伝えていたので、圧倒されました。また、聴く側の態度も熱心に聴いているなあ〜、さすがだなと思いました。生き方というのは、まず“あこがれ”から始まる場合も多いと思うのですが、今日の講演会もきっと多くの生徒がいろんなあこがれをいただいたのではないのでしょうか。帰宅後、子供に尋ねましたところ、「ああなたならイイな...」と思ったそうです。あの人のあの部分、この人が言っていたあの話などと、部分的に心に刻まれた事と思います。

また、もうひとつは、どうやって育てたら、ああいう素晴らしい子どもたちになるんだろう...、きっと素敵な親御さんなんだろうなあ〜などと感心というか...自分の子育てに今ひとつ自信のない私としては、そんなことまで考えてしまいました。

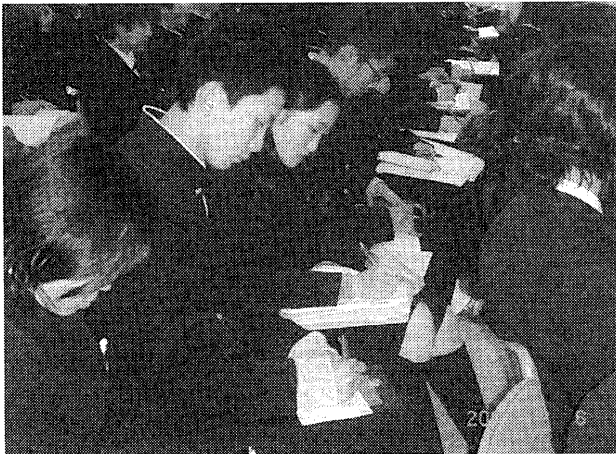
高3で「結果も大切だが、プロセスも大切だ」なんて思えるのは、ひとつひとつのことに真剣に取り組んだから感じることができたんでしょう。凄い！これだけ情報が多く、時間を費やす手段はTV、携帯tel、メール、TVゲーム、etc.とあり、勉強する時間をやりくりするのに大変ですらある時代に、いかに自分のやりたいことのポイントを絞って、短期集中で効率よく勉強するかは難問です。

ある高3の方は、120%勉強に打ち込んだと言っていま

したが...、そういうことを少し年上の方から聴く方が、親が何百回言うよりずっと効くと思いますので、こういう機会はとても良いと思います。これからも続けて頂けたらうれしく思います。自分の夢に近づくための勉強の仕方を、具体的に知ることができるかなと思います。また、3人の高3担任の先生方のお話も三者三様のエールといった感じで、温かさに包まれた気がしました。

知・情・意のバランスの取れた人間に育って欲しいと常々思っておりますが、素晴らしい環境に恵まれた学校で、良き友、良き先生、良き先輩方に多くの事を学ばせて頂いていることに感謝の気持ちでいっぱいです。今日は参加することを迷いましたが、行って良かったなあと思いました。ありがとうございました。

(中学1年生女子の母親)



4 まとめ

これまでの本校の総合人間科の取り組みにおいては、フィールド・ワークに代表されるように、校外へ、地域社会へと、絶えず外ばかりに学びのフィールドや情報を求めてきた。生徒たちのキャリア形成を支援することを念頭に置くならば、中高一貫校のメリットを最大限に活かして、今後は校内で中学生と高校生との“学び合い”の場や方法を開拓していくことも大切なのではないか。校外・校内でできることを整理し、バランスの取れたプログラム作りを目指していくことを今後の課題として認識しておきたい。

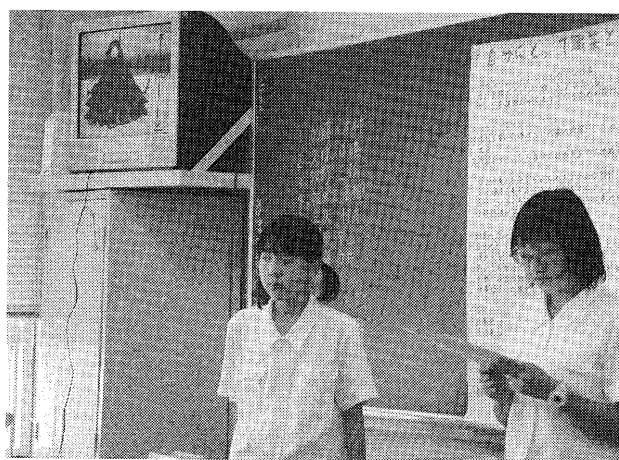
【参考文献】

- ・名古屋大学教育学部附属中・高等学校編著。(2003).『新しい中等教育へのメッセージ』.黎明書房.
- ・木下雅仁、佐光美穂、中村明彦、原順子、高橋伸行。(2002).「総合人間科の中高一貫カリキュラムの導入期を支える『生き方を探る』実践～『出会い』から人生の足跡をたどる～」.名古屋大学教育学部附属中・高等学校編.『名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要』.第47集.
- ・木下雅仁。(2002).「5. 大学との連携をいかした青年期のキャリア形成 ①総合人間科(総合学習の成果) 中学1年」.教育学部附属学校自己点検・自己評価委員会編『2001年度附属学校自己点検・自己評価報告書新しい中等教育の創造一併設型中高一貫モデル校として一』.名古屋大学教育学部附属中・高等学校.
- ・原順子、今村敦司、飯島幸久、木下雅仁、大口悦子。(2001).「IV 2000年度 総合人間科の取り組み 中学1年生 生き方を探る ～出会いから学ぶ～」.名古屋大学教育学部附属中・高等学校編.『名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要』.第46集.
- ・安彦忠彦・名古屋大学教育学部附属中・高等学校。(1997).『中・高「総合的学習」のカリキュラム開発』明治図書.

資料 2002年度 中学1年生 総合人間科 1年間の学習の流れ

〈前期〉

授業日	学習内容	備考・教具など
4月18日(木)	オリエンテーション(学年テーマ・授業概要説明など)	総合人間科ファイル
4月25日(木)	第1回フィールド・ワーク準備(1) (ペア決定、交通経路・交通費調べ、質問項目決定、依頼状作成など)	準備用ワーク・シート 時刻表 ネット検索 便箋・封筒
5月2日(木)	第1回フィールド・ワーク準備(2) (質問内容の吟味、依頼状の清書など)	ワーク・シート 便箋・封筒
5月18日(土) 5月19日(日)	第1回フィールド・ワーク(1班) (ペアを組んだ友だちの家を訪問する)	総合人間科ファイル インタビュー記録用紙
5月25日(土) 5月26日(日)	第1回フィールド・ワーク(2班) (ペアを組んだ友だちの家を訪問する)	総合人間科ファイル インタビュー記録用紙
5月30日(木)	第1回フィールド・ワーク報告書作成 発表会準備(報告書の整理、構想・原稿作成など)	報告書用紙 発表計画用紙
6月6日(木)	第1回フィールド・ワーク発表会の準備 発表用原稿・提示資料作成など	模造紙 画用紙 ペン 原稿用紙
6月20日(木) 5・6限目	第1回フィールド・ワーク発表会(1) ペアでの発表(1組5分間)	公開授業 感想プリント プレゼンテーター アドバイスシート
6月27日(木) 5・6限目	第1回フィールド・ワーク発表会(2) ペアでの発表(1組5分間)	公開授業 感想プリント プレゼンテーター アドバイスシート
7月11日(木)	第1回フィールド・ワークのお礼状の作成 下書き、清書(かもメール葉書)	かもメール葉書
9月12日(木)	前期の総合人間科の取り組みのまとめと反省 ～後期の第2回フィールド・ワークに向けて～	総合人間科ファイル



《後期》

授 業 日	学 習 内 容	備 考・教 具 等
10月10日 (木)	第2回フィールド・ワーク準備(1) (テーマ決定、フィールド・ワーク先の選定、アポイントメント取り、質問内容の検討など)	準備用ワーク・シート 質問項目プリント ネット検索 図書室利用
10月24日 (木)	第2回フィールド・ワーク準備(2) プレ研究の実施とフィールド・ワーク準備	プレ研究用原稿用紙 ネット検索 図書室利用
11月7日 (木)	第2回フィールド・ワーク準備(3) プレ研究原稿の仕上げとフィールド・ワーク準備	プレ研究用原稿用紙 ネット検索 図書室利用
11月12日 (火)	第2回フィールド・ワーク (午後～)	総合人間科ファイル インタビュー記録用紙
11月21日 (木)	第2回フィールド・ワーク報告書作成 発表会準備(報告書の整理、構想・原稿作成など)	報告書用紙 発表計画用紙
12月5日 (木)	第2回フィールド・ワーク発表会の準備 発表用原稿・提示資料作成など	模造紙 画用紙 ペン 原稿用紙
12月9日 (月) 5・6限目	第2回フィールド・ワーク発表会(1) ～個人研究発表～(1人5分間)	公開授業 感想プリント プレゼンテーター アドバイスシート
12月12日 (木) 4・5・6限目	第2回フィールド・ワーク発表会(2) ～個人研究発表～(1人5分間)	公開授業 感想プリント プレゼンテーター アドバイスシート
冬休み期間	研究集録用原稿作成(下書き)	研究集録用原稿用紙
1月中	研究集録用原稿作成(清書)	研究集録用原稿用紙
2月6日 (木) 5・6限目	高3生に学ぶ『生き方を探る』講演会 高3生ゲストスピーカー4名・高3担任3名	第一総合教室 中学2年生との合同企画
2月13日 (木) 5・6限目	・高2生(留学生・留学経験者のスピーチ) ・中2『生命と環境』の学習に向けて(1)	第一総合教室 図書館
2月20日 (木) 5・6限目	・中2『生命と環境』の学習に向けて(2) スクラップブック作り	新聞・雑誌記事 スクラップブックノート
3月6日 (木) 5・6限目	2002年度中学1年生『生き方を探る』研究集録配布 1年間の取り組みを振り返って(反省と自己評価)	2002年度研究集録 自己評価用紙